

桓武朝における造都と征討に関する歴史地理学的考察

神 英雄

一 はじめに

桓武朝は、天武系王朝から天智系王朝へ皇統が交代した「革命的王朝」であり、律令期最大の変革期である。桓武天皇は、天皇の権威を強化するべく、菅野真道に代表される中級貴族の積極的登用をはかり、種々の政治改革を実施する一方、宗教儀礼上においても、郊天祭祀などの種々の改革を行なった。『日本後記』延暦二四年(八〇五)一二月七日に、

是日、中納言近衛大将従三位藤原朝臣内麻呂侍_二殿上_一、有_レ勅、令_下参議右衛士督従四位下藤原朝臣緒嗣、與_二参議左大辨正四位下菅野朝臣真道_一相_中論天下德政上、于時緒嗣議云、方今天下所_レ苦、軍事興_二造作_一也、停_二此兩事_一、百姓安_レ之、眞道確_二執異議_一、不_二肯聽_一焉、帝善_二諸嗣議_一、即從_二停廢_一、有_レ識聞_レ之、莫_レ不_二感歎_一

とあるように桓武朝の政治の支柱は、長岡京・平安京の造営と蝦夷征討であつた。征討は外延的拡大の象徴であり、

造都は内治の象徴であった。従来の研究では、造都と征討はそれぞれが独立した事業として捉えられており、両事業を併せて考察することはあまり行なわれなかった。

しかし、両事業は、ともに新王朝の成立を内外に宣揚する意図をもったものであると考えられ⁽²⁾、本来一体のものとして、桓武天皇や当時の律令官人に認識されていたと考えられる点が少なくない。本稿においては、空間論的視点から、長岡京造営の際に郊祀壇が造られたり、蝦夷の梟帥が処刑された河内国交野郡を例に、造都と征討の接点を探りたい。研究の具体的方法としては、古記録・古地図などの過去の資(史)料を分析する方法と、空中写真・地形図・景観などの現景観の中から歴史的要素に関する諸要素を析出し、比較考察する方法を併用する⁽³⁾。

二 長岡京造営の空間論的考察

都城造営が大規模な地域計画(国土整備計画)に基づいて設計されたものであることは周知の事実である。

長岡京の造営は延暦三年(七八四)に始まり、その後平安京に移るまでの一〇年間工事が続けられた。長岡京の朱雀大路のほぼ真南の方向にあたる大阪府交野市かたのの北部生駒山地には交野山かうのが位置する⁽⁴⁾。そこで、千田稔は藤原京に対する飛鳥のミハ山、平安京に対する船岡山や甘南備山のように、大阪府交野市にある交野山が長岡京造営の原点となったのではないかと指摘した。

しかしながら、この見解では、交野山が長岡京中軸線のほぼ真南の方向に位置する点をもって、両者の間に密接な関係があるとされてきた点が疑問として残る。両者の間に何らかの繋がりとするのであれば、かつて藤岡謙二郎が試みたような、条里プランや交通路などを含めた地域計画論の中でそれを証明する必要があるものと考ええる。そ

ここで、まず、古代交野郡の地域計画と交野山の関係について述べてみたい。しかるのち、造都と交野山こしのの関係を明らかにすることとする。

(一) 交野郡の条里型地割の分布と交野山

交野郡の条里プランに関する考察は、既に片山長三（三）や桑原公德（三）によってなされている。桑原によれば、交野郡の条里型地割は次の四つに大別できるといふ。

1 交野郡北部条里 旧交野郡北部に分布する条里型地割である。「正方位」の条里型地割が、枚方市楠葉・船橋・招堤・牧野・大峯・藤原地区といった交野郡北部地域に展開している。

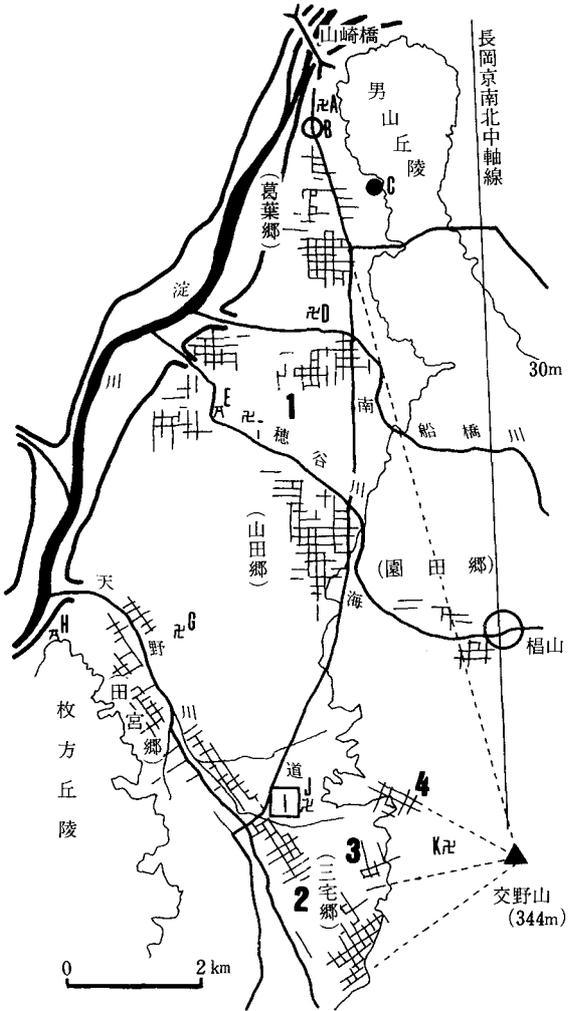
2 交野郡南部条里 天野川流域の交野市森・郡津、枚方市村野・田宮・大垣内町にかけての谷底平野にN三〇度Wの方格地割が分布する。この地域には交野郡の郡家と推定される郡津遺跡があり、付近は交野郡の中心地域であったと考えられる。

3 交野市倉治地区条里 交野市倉治地区の枚方台地上に、N二〇度Eの方位を有する条里型地割が狭い範囲で分布する。

4 交野市私部地区条里 交野市私部の洪積台地上に、N一五度Wの方格地割が展開する。

これらの条里区を中心に交野郡の空間構成を図示した図1によれば、「正方位条里」である交野郡北部条里の畦畔は、条里区の南部において、推定南海道の方向と合致し、長岡京と交野山を結ぶ長岡京南北中軸線の方向と一致する。交野市倉治地区条里の北端の東西方向の畦畔を東方に延長すると、交野山頂に至る。交野市私部地区条里も、南端の畦畔を東方に延長すると交野山頂に至る。

交野郡南部条里の場合は、より直接的に交野山と結びつくようである。交野郡南部条里区は、その基準を南端の交野市森地区の天田宮社付近を通る東西の畦畔に設定したもののようである。交野郡の条里の数え方については、郡の南端から北に向かって数えたとする片山説と、郡北端の楠葉地区から南に向かって数えたとする桑原説がある。しかし、交野郡北部条里と交野郡南部条里とは方位が異なり、一体のものとして見ることは出来ないのではなからうか。建保二年（一一二四）書写了と記されている『行基年譜』には



- 1. 交野郡北部条里
- 2. 交野郡南部条里
- 3. 交野市倉治地区条里
- 4. 交野市私部地区条里
- A. 久修園院
- B. 推定楠葉駅
- C. 郊祀壇
- D. 船橋廃寺
- E. 片笠神社
- F. 九頭神廃寺 (久須々美神社)
- G. 百濟寺
- H. 意賀美神社
- I. 交野郡家
- J. 長宝寺廃寺
- K. 開元寺遺跡

図1 交野郡の空間構成

(前略) 神龜二年乙丑

久修園院、山崎、九月起、

在「河内国交野郡一条内」、(下略)(9)。

とあり、神龜二年(七二五)段階の条里呼称法として「一条」が見られる。そして、『石清水文書』に収められた「太政官課」延久四年(一〇七二)九月五日条には「交野南条」が記されている。そこで桑原は、施工当初には数詞で呼ばれていたが、平安時代後期以降において、条は南条と北条にわけ、里は固有名詞を用いていたと推定する⁽¹⁰⁾。この推測は正鵠を得たものと考ええる。天野川流域の枚方市田宮には「南条」なる地名があることから交野郡北部条里が北条で、交野郡南部条里が南条であった可能性が高い。

いずれにしても、両条里区は独立していたものと思われる。交野郡北部条里は山城との国境線のある北から南に向かつて数え、交野郡南部条里は、他の河内国諸郡と同様に南から北に向かつて数えたとするのが妥当ではなからうか。天田宮社付近を通る交野郡南部条里の南端の畦畔を条里基準線として、東西方向に延長すると、交野山頂を通る。

これら条里区と交野山の関係を偶然性で説明することは出来ない。四条里区は、いずれも交野山を起点として施工されたするのが妥当であろう。

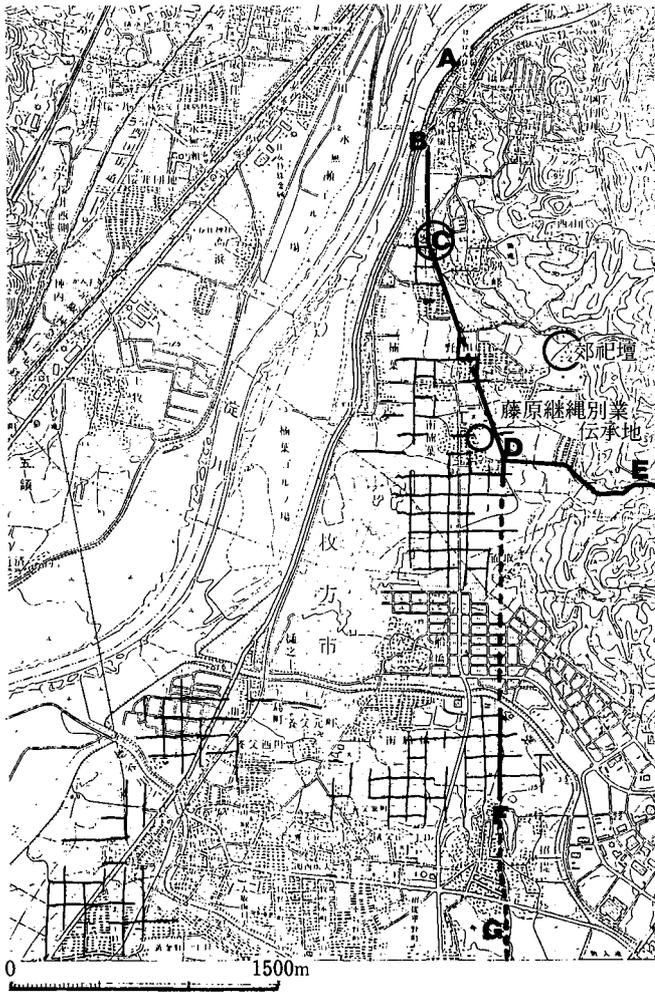
(二) 交通路と交野山の関係

交野郡には、長岡京造営時に南海道が敷設された。『続日本記』延暦三年(七八四)七月四日条に、

仰二阿波、讃岐、伊予三國一、令レ進下造二山崎橋一材料上⁽¹¹⁾。

とあることから、長岡京造営時に、山崎橋とともに南海道が敷設されたものであると見ることが出来る。『延喜式』

その位置については、楠葉野田や南楠葉とする説¹²もあるが、久修園院や楠葉東遺跡瓦窯群（平野山瓦窯址）のあ
る楠葉中之芝一丁目とする説が有力である。交野郡における南海道の具体的な経路については、これまで不明な点が



- A. 推定山崎橋架橋地点 B. 久修園院 C. 推定楠葉駅
D. 南楠葉 E. 河内・山城国境 F. 御堂池 G. 今池

図2 交野郡北部条里と南海道

〔基図は1：25,000地形図「淀」を縮小〕

多かった。そこで、経路を推定した。図2は、交野郡北部の条里型地割と南海道の関係を示したものである。これによると、楠葉駅推定地の楠葉中之芝一丁目(C)から楠葉朝日三丁目(D)にかけての台地上に断続的ながら幅員一・五メートル程度の道が直線的に通じているのが観取できる。この道は、正南北の方位を有する周辺の条里型地割に対して、斜めの走向を示し、推定山崎橋架橋地点(A)からほぼ一直線に南東方向に延びている。この道は地元で「高野道」と称されていたこと、近年まで部分的に大字界として利用されていたこと、直線的形態などを考えると、古代の駅路遺構であることは間違いない。また、周辺の条里型地割と方位が異なることから見て、直線道路は方格地割の施工と同時に測設されたものでないことがわかる。方格地割は、直線道路より北側に分布するが、所々で南海道の南側に延びている。その場合、この道は小曲折を生じている。これは、足利健亮¹³⁾によって摂津国の山陽道で報告された例と類似している。すなわち、楠葉地区では直線道路が造られ、その後の方格地割が施工されたものと考えられる。その際、方格地割の施工に伴って直線道路が小曲折を生じたものと思われる。

楠葉地区の最北端には、神亀二年に行基によって造られた久修園院(B)がある。境内から大量の瓦が出土することから、古代以来その場所は移動していないと見られている。そこで、現在の寺地が、『行基年譜』にあるように交野郡の一条に相当することがわかる。したがって、現在の条里型地割の原初形態は、神亀二年以前に求めることが出来る。この考えが正しいとすると、楠葉地区の斜向道路の起源は、方格地割の施工時期である神亀二年以前よりさらに遡ることになる。

『続日本記』和銅四年(七一)正月二日条によると、平城京から大宰府に向かう山陽道が整備され、楠葉駅が設置されたようである。この時同時に置かれた駅家が、山城国相楽郡の岡田駅、綴喜郡の山本駅、摂津国嶋上郡の大原駅

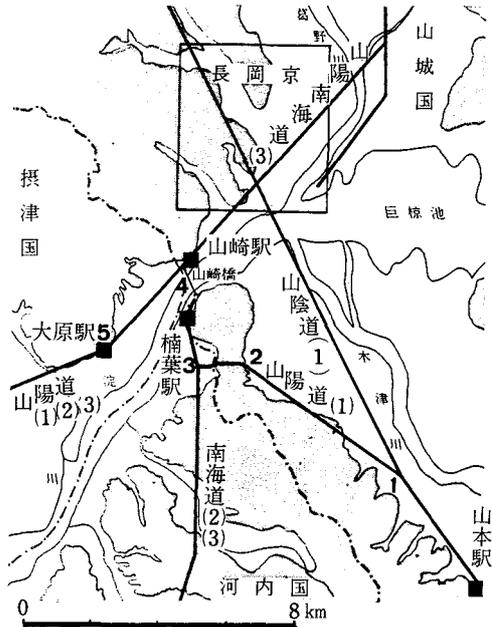


図3 山城・河内・摂津国境付近の駅路

駅路の(1)は平城京時代、(2)は長岡京時代、(3)は平安京時代のものを指す。〔注(12)及び、『日本歴史地図』(柏書房1982)136・137頁、148・149頁を修正作図〕

を知りえた。この道は標高四五メートルの地点で男山丘陵を越える。これは、河内と山城を結ぶ一〇の道のうち、最も低い地点で国境を越える道である。そして八幡市月夜田は、岡村から西南に向かう直線道路が男山丘陵に取りつく地点にあたる。この道の山城側の傾斜交換線近くには、七〜九世紀に営まれていた志水廃寺がある。これらのことから、楠葉地区の斜向道路(同3〜4)は、平城京からの山陽道として和銅四年に測定されたもの(同1〜5)の一部であり、長岡京遷都に伴って1〜3が廃止され、改めて南海道となったものであると考える。

図2(C)〜(D)結ぶ推定南海道を延長すると交野山頂に至る。現在も所々に残存する直線道路を歩くと、常に正面

などである。このうち、綴喜郡の山本駅は現

在の京都府綴喜郡田辺町三山木の山本に比定されている¹⁴⁾。足利によれば、山本駅と楠

葉駅を結ぶ駅路は、田辺町北部の岡村(図3

―1)で山陰道と分岐して北西方向に直進、

八幡市内のいずれかの地点で男山丘陵を越え

たと推量されているが¹⁵⁾、具体的な経路は

不明であった。そこで、河内・山城国境沿い

に道路痕跡を探してみた。そして、二〇年前

まで八幡市月夜田(同2)と斜行道路の南端

に近い南楠葉(同3)を結ぶ道があったこと

に交野山頂を見通すことができる。このことから、楠葉地区の斜向道路は山崎橋から交野山頂を指向して測設した計画道路であると考える。

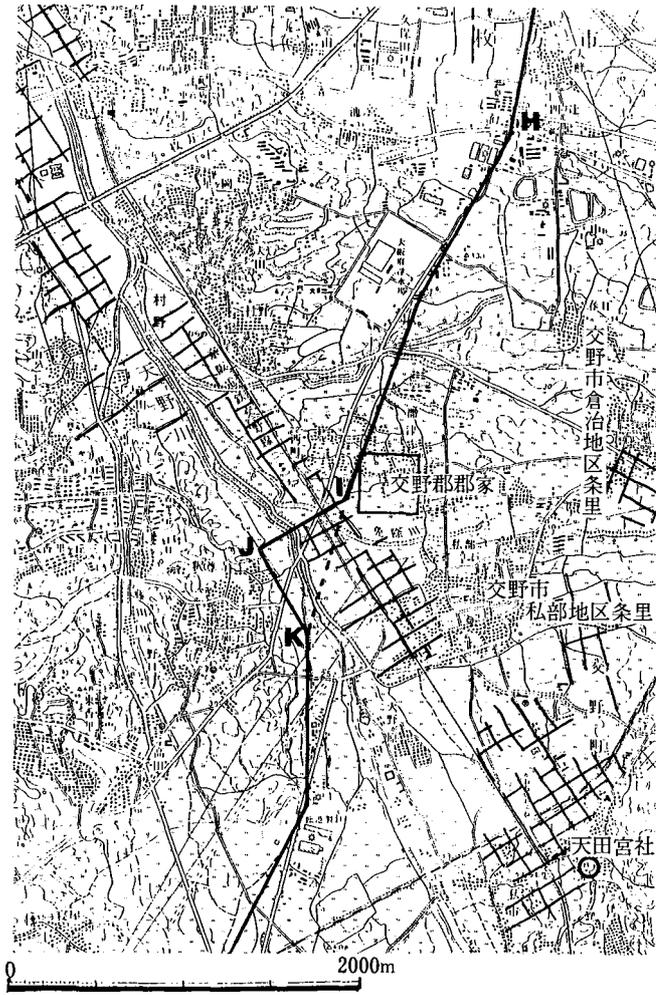
(D)付近で斜向道路は消える。(D)以南の南海道は、正南北に方向を変え、招提地区の東端の御堂池(F)・今池(G)の二つの溜池沿いに南下し、出屋敷付近で後世の東高野街道に合流したと推量する。(D)以南のルートは長岡京朱雀大路と交野山を結ぶラインに並行する(図1参照)。

東高野街道は枚方市出屋敷から四ツ辻、交野市郡津を経て星田へ向かい、大部分が現在主要地方道枚方交野寝屋川線として拡幅・整備されている。讚良郡・河内郡・高安郡など生駒山地西麓諸郡では、南海道が東高野街道に踏襲されていることが足利によつて報告されている¹⁶⁾が、交野郡の場合にも同様であつたようである。招提から四ツ辻にかけての推定南海道は、交野郡北部条里の中を通る。それにも係わらず、条里余剩帯は検出されない。これは条里型地割の施工時期と南海道の測設時期が異なることを意味する。すなわち、条里型地割の施工が南海道の測設より遡るものと考える。

図4は交野郡南部条里と南海道の関係を示したものである。郡津の(I)付近で天野川谷底平野に降りた南海道は、一旦東高野街道と離れて、交野郡南部条里の畦畔に沿って向きをかえ、茄子作地区の川越小学校付近(J)で天野川を渡河、交野市私部西五丁目(K)で再び東高野街道に合流したと思われる。交野郡南部条里を通る場合も、条里余剩帯は検出できない。そこで、招提から四ツ辻にかけての場合と同様、先に条里型地割があつて、後に南海道が作られたと見ることができる。条里型地割の起源を交野郡北部条里と同時期とした場合、道路の測設時期は、神亀二年以降となり、史料に見える南海道の敷設時代と矛盾しない。そして、南海道が条里型地割に規制されていることから、招提

地区以南の南海道も交野山を中心とする地域計画によって測設されたものであることがわかる。
 以上から、交野郡内の南海道は、交野山を中心とする地域計画に規定されていると考えられる。

(三) 交野山の神南備山の機能



H. 枚方市四ツ辻 I. 交野市郡津 J. 枚方市茄子作川越小付近
 K. 交野市私部西五丁目

図4 交野郡南部条里と南海道

{基図は1:25,000地形図「枚方」を縮小}

このように、交野山が、律令期の交野郡の地域計画の中心ないしは起点の機能を有していたのはなぜであろうか。以下その理由について考えてみたい。

海拔三四メートルの交野山は、北部生駒山地では決して一番高い山でないにも係わらず、山頂が烏帽子状の独特の形態であるため、一際目立つ山である。交野山の山頂には観音岩と称する巨岩があり、山麓からでも望むことができる。観音岩は長く水の神・農業神として地元の信仰を集めてきた。鎌倉～室町時代にかけては、山頂近くに岩倉元寺があつた。寺名から見て、山頂の巨岩が磐座として認識されていたことは間違いない。そこで、交野山は古くより交野郡において神南備山的存在であり、祭祀場としての機能をもっていたものと推量されるのである。

ところで、平安時代初期に成立したと考えられている、『先代旧辞本紀』天孫本紀には物部氏の祖神である饒速日命が天磐船に乗り河内国河上哮峯に降臨したとする記事がある⁽¹⁷⁾。この記事は山上降臨神話であり、その内容は事実とは考えられないが、古くより物部氏に伝承されていたものであることは間違いない。従来河内国哮峯については、南河内郡河南郡平石の磐船神社付近の山とする説、天野川上流とする説の二説あつた。このうち、河南町とする説は既に多くの研究者によって否定されており、天野川上流とすることに異論はないだろう。この問題を解くために重要な手懸かりとなる史料に延暦八年（七八九）の奥付のある『住吉大社神代記』がある。同書の膽駒神南備山本紀条には、

四至 東限膽駒川。龍田公田。南限賀志支利坂。山門川。白木坂。江比須墓。西限母木里公田。鳥坂至。北限饒速日山⁽¹⁸⁾。

という記載がある。この文章は、生駒山地の範囲を記したものである。東限の膽駒川とは竜田川のことであり、南限



図5 生駒山地の切峰面と四至

〔坂口慶治「地形と地質」(「枚方市史」1、1977)4頁に加筆〕

の山門川は大和川、西限の母木里は東大阪市枚岡付近、鳥坂は高井田付近を指すと思われる。褶曲山地である生駒山地は、長さ三五キロメートル・幅五〜六キロメートルの南北に長い山地である。主峰の生駒山(六四二メートル)を中心に、五〇〇〜六〇〇メートルの尾根が続き、北に行くにつれて低くなっている。図5は生駒山地の切峰面と四至を示したものである。これによれば、北部生駒山地は生駒山と独立しているように見えるが、住吉大社側から見れば一体のものと思えらる。その北端は交野山から東の国見山にかけて求めることができる。名称から見て、饒速日山と哮峯は同一のものである。それでは饒速日山もしくは哮峯はどこか。通説では並河永が『河内志』で述べた讚良郡西田原(現在の四条畷市上田原)の磐船山とする。しかし、管見による限りでは、四条畷市上田原には磐船山の伝承地はない。恐らく『四条畷市史』¹⁹⁾が指摘するように、『河内志』の示す磐船山は、交野郡の磐船神社(交野市私市九丁目)の裏山を讚良郡西田原と誤認したものであろう。確かに磐船神社には神体とされる一五・六メートルの船形の巨岩があるが、同社が位置するのは天野川峡谷であり、背後の山も山上降臨神話にふさわしい山容ではない。それゆ

え、磐船神社背後の山を饒速日山もしくは哮峯とすることには、否定的にならざるを得ない。

この問題を解くためには、交野郡における物部氏の動向が重要な鍵となる。交野郡には肩野物部連や肩野連が蟠踞していた。『新撰姓氏録』左京神別上には、物部肩野連は伊香我色乎命の後とあり⁽²⁰⁾、右京神別上にも肩野連は饒速日命六世伊香我色雄命の後と記してあり⁽²¹⁾、両者はともに饒速日命に繋がる。伊香色雄命は物部氏の始祖の一人として伝承されたものである。伊香我色雄の「伊香」の名辞については、『和名抄』河内国茨田郡に「伊香郷」があり、その遺称地が天野川と淀川の合流点付近の枚方市伊加賀町である。「伊香郷」が近江国伊香郡にもあることから、河内国の「伊香」と近江国の「伊香」とは、ともに物部氏を通じて密接に関連するようである⁽²²⁾。したがって、哮峯を交野郡の天野川流域に求めることは至当なことである。そして、饒速日命が降臨した哮峯として古代人に認識されるためには、山容の特異性と天の磐船に比定されるべき巨岩の存在が重要な要素とならう。それゆえ、山上降臨神話にふさわしい山を天野川流域で探したならば、交野山が最も適当であるということになる。『先代旧辞本紀』や『住吉大社神代記』の成立した平安時代初期以前には、交野山は、饒速日命が降臨した哮峯として広く認識されていたと思われる。

(四) 長岡京と交野山

それではなぜ、交野郡の神南備山というべき交野山が、長岡京造営の基準となったのであろうか。

長岡京と交野郡の関係について考察したものに、戸田秀典の考察がある。戸田は、交野郡が桓武天皇ゆかりの地でありながら、都城造営が営まれなかったのは、四神相応の地でなかったことや、交野郡に関係の深い藤原継縄や百濟王一族が政治的には無力であったためであるとする⁽²³⁾。しかし、交野郡には造都と不可分の関係にある郊祀壇が営

まれていたのである。したがって、都城が造営されなかつた点を、藤原継縄や百済王氏の政治力の強弱で説明するのはいかなるものであろうか。むしろ、交野郡で郊天祭祀が営まれるほど、継縄や百済王氏の政治力が強大であったということができるとはあるまいか。

桓武天皇は、延暦二年（七八三）以来、在位中にしばしば交野の行幸・遊獵を行なった。天皇の遊獵には、民情視察・状況内偵・遷都の下見など特殊な目的をもったものがあつたが、交野行幸のうちの数回は、郊天祭祀の祭場を訪れたものであると思われる。例えば、延暦六年（七八七）の郊天祭祀の半月前には遊獵と称して交野郡に行幸し、藤原継縄の別業に滞在した。同様に、長岡京遷都の前年の延暦二年一〇月や、平安京遷都の前年の延暦一二年十一月にも交野郡行幸が行なわれている。これらの場合も、単なる遊獵ではなく、郊祀壇やその予定地の訪問が最大の目的だったようである。

郊天祭祀は、周・秦以来の中国の諸王朝が実施してきた大礼である。都城正中の南門の南ないしは東南三―四キロメートルの地に郊祀壇を造り、冬至に円丘で皇帝が柴を焚き、胙を捧げて天帝すなわち昊天上帝を祀つた宗教儀式である。わが国においては、桓武天皇が長岡京遷都に際し、延暦四年（七八五）十一月一〇日の冬至の日に行なつたのを嚆矢とし、記録上は、延暦六年、斎衝三年（八五六）にも実施された。郊祀壇の場所はいずれも交野郡柏原（柏原野）であつた。

柏原（柏原野）の比定地については、諸説あるが、確説はなかつた。そこで、筆者は、郊祀壇の現地比定を試みたことがあつた²⁴。その結果は次のようになる。

わが国の郊祀壇は、百済の熊津城の例に倣つて、都城正中の南門（羅城門）の西南の地にあたる交野郡柏原（柏原

野)に築かれた。これは、郊天祭祀の思想が中国から直接もたらされたものではなく、百済王氏に代々伝えられていた百済の郊天祭祀に範を求めたためであると思われる。長岡京の羅城門推定地からの距離や、歴史的環境から、郊祀壇が営まれたのは、枚方市楠葉の交野天神社付近であると考えられる。郊天祭祀の実施を天皇に強く勧めたのは、交野郡を本拠としていた百済王氏と、百済王明信を妻に持ち、百済王氏を支配下に置いていた藤原継縄であった。明信は後に桓武後宮の尚侍となった人物である。そして、桓武天皇の生母高野新笠は、百済系渡来人和史乙繼の娘であった。そのため百済王氏は、天皇をして「百済王者者朕之外戚也²⁵⁾」と言わしめたように、天皇と深く結びついていた。

このように、交野郡は天皇の「外戚」たる百済王氏の本拠や継縄の別業があり、郊祀壇を通じて長岡京造営と密接に関係していた。それゆえ、桓武朝において、交野郡が都城造営の起点となり、それに伴って、神南備山としての機能をもった交野山が、長岡京造営の起点となったと考えられるのである。

交野郡の柏原(柏原野)では、平安京遷都後も郊天祭祀が営まれた。これは、長岡京廃止後も、交野郡が都城経営の基準として認識され続けていたことを示すものである。それゆえ、この基準線は、国土計画の基本線として、平安京遷都後も存続していたと推定される。

三 造都と征討の接点

(一) 征討の空間論的考察

延暦二十一年(八〇二)八月、胆沢城の完成とともに蝦夷の梟帥大墓公阿弭利為と盤具公母礼が降伏した。国史大系

本『日本紀略』の延暦二十二年八月一三日条には、

斬二夷大墓公阿弋利為。盤具公母禮等二。此二虜者。並奧地之賊首也。斬二虜一時。將軍等申云。此度任願返入。招二其賊類一。而公卿執論云。野性獸心。反覆无レ定。儻縁二朝威一獲二此梟帥一。縱依二申請一。放二還奧地一。所謂養レ虎遺レ患也。即捉二両虜一。斬二於河内国杜山一。(傍線筆者)(26)

とある。征夷大將軍の坂上田村麻呂は阿弋利為と母礼の助命を願い出たが、公卿らは「野性獸心は反覆定まることはない。もしも、奥地に放還したならば、虎を養って患いを遺すことになる」と主張した。そこで二人を河内国杜山で斬殺した、というのである。

坂上田村麻呂と阿弋利為・母礼の戦いの状況や顛末・斬殺地については、本来は『日本後紀』に記されていたと見られる。しかし、『日本後紀』には散逸部分が多く、当該年の部分も現存しない。そこで、平安時代末期頃に成立した『日本紀略』や、元禄五年(一六九二)に鴨祐之が『日本後紀』の欠を補うために編纂した『日本逸史』によって推定するほかはないことになる。ところが、新訂増補国史大系『日本紀略』は斬殺地を「杜山」と記すが、旧版の国史大系『日本紀略』は「植山」とし、『日本逸史』でも「植山」と表記するなどの混乱が見られる。そこで、『日本紀略』の諸写本並びに『日本逸史』写本を比較・検討して、『日本後紀』に記載されていた地名を推定すると、原典に記されていた文字は「相山」であったと見られる。それが、永年の書写によって「植山」「杜山」などに変化したものと考えられる(27)。古代河内国の郷名に相山はない。後世の関連地名には、唯一交野郡に杉村(現枚方市杉地区)があるだけである。杉村は、中・近世の文書では相や杉本と記されることがあった。そこで杉は「相山」の転化したものであると考える。

その場所は、図らずも長岡京朱雀大路と交野山を結ぶ基準線上にあたる。これは単なる偶然とは思えない。

斬首は、律令体制下において最も重い刑罰であり、『獄令』決大辟条²⁸によれば、京内の東西市及び諸国の市において行うことになっていた。しかるに、阿弔利為・母礼の場合のみ、慣例を破って河内国で実施したのである。しかも、当時、政府が降伏・入朝した蝦夷を厚遇することはあつたが、殺害した例は全くなかつた。延暦十一年（七九二）には、帰降した胆沢公阿奴志己を「賜物放還」したのを始めとして、浮囚や帰降した蝦夷を朝堂院で饗応したというものが多い。だが、阿弔利為と母礼だけは斬殺した。これを官僚の公憤によるものとする従前の解釈は一面的過ぎるように思われる。従来の慣行を破って蝦夷の梟帥を長岡京朱雀大路と交野山を結ぶ基準線上にある交野郡楯山で斬殺した背景には、さらに特別な意味が込められていたように思われるのである。

阿弔利為・母礼の斬殺された交野郡は、百済王氏の本拠地である。百済王氏には、征討と関係の深い百済王敬福と俊哲がいた。敬福は、陸奥守在任中の天平二十二年（七四九）、小田郡で産出した金九〇〇両を献上した功績によって従三位となり、交野郡の地を与えられ、百済寺を建立したとされている。敬福の孫の俊哲は、宝亀十一年（七七九）に陸奥鎮守副將軍となり、天応元年（七八一）征夷の功績によって正五位上勳四等に進んだが、延暦六年に日向権介に左遷された。延暦八年罪を許されて入京し、延暦一〇年に征夷副使となり陸奥鎮守將軍を兼任した。

交野郡はまた、百済王一族を率いていた藤原繼繩の別業のあつた地でもある。繼繩は、宝亀一〇年、陸奥での伊治公磐麻呂の乱鎮圧のために征東大使に任じられたが、度々督促をうけても軍を進められなかつたとして更迭された。蝦夷と律令政府との対立は、この事件を契機として激化し、やがて胆沢の蝦夷と律令国家の全面対決へと発展していった。そして、繼繩は、蝦夷との戦いが激化する中、延暦十五年（七九六）に亡くなるのである。

延暦二一年の阿弼利為・母礼の投降は、律令国家にとって初の本格的勝利であった。その際、政府は前例を全く無視して、梟帥を都城の南郊で処刑した。これを、征討に功績のあった百済王氏に敬意を表してのことであるとすれば、説明がつかない。すなわち、敬意を表したのであれば、殺害は本拠地の百済寺周辺で行うのが当然である。しかも、斬殺地と百済寺とは、五キロメートルも離れている。したがって、相山での処刑の背景には全く別の意図がこめられていたと見るべきであろう。百済王氏と藤原継縄は、征討と密接に関連するのみならず、郊天祭祀を通じて造都とも深く結びついていた。そのため、長岡京の朱雀大路は交野山を基準に測設されたのであった。これらのことから、斬殺地の決定には、造都との関係が大きく係わっていたと考えられる。

(二) 造都と征討の接点

『日本紀略』延暦一三年九月二十八日には、

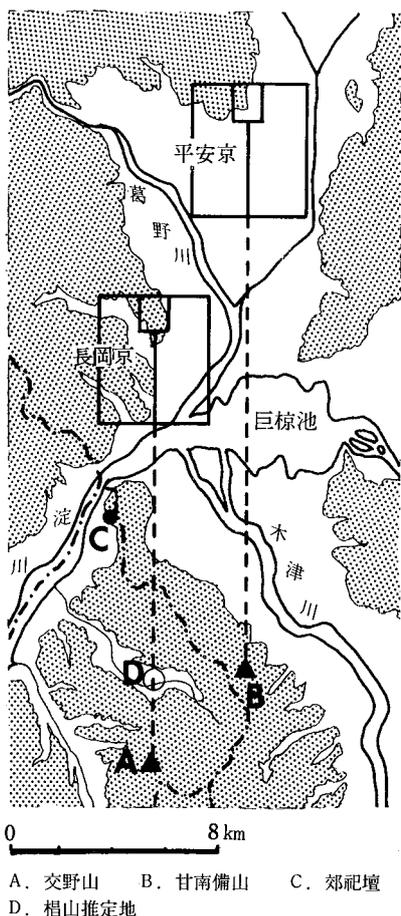
奉_レ幣帛於諸国名神_一、以下遷_二于新都_一、及欲_{上レ}征_二蝦夷_一也₍₂₉₎。

という記事がある。これは桓武朝の二大事業を総合して記したのではなく、文献史学の立場から、福井俊彦³⁰⁾が指摘しているように、桓武朝においては造都と征討が一体的に行われていたことを示すものである。福井は、桓武朝における征夷と造都の対比年表を作成して、両事業について比較・検討した。それによれば、延暦三年に長岡京遷都を目前にして大伴家持が持節征東將軍に任命されたことや、延暦一二年正月一五日の宇太村遷都の直後の同二月一七日に征東使を征夷使に改めた件などにみられるように、両事業は時期的に符合するという。そこで、桓武朝においては、造都と征討が常に一体的に行われていたと結論した。

このような文献史学からの考察結果を勘案すると、阿弼利為と母礼を長岡京造営の基準線上の相山で殺害したのは、

官僚の公憤や百濟王氏への敬意の現れなどではなく、両事業が一体的に行われていたことを示すものにほかならないと考えられる。

阿弓利為と母礼が河内国楯山で斬殺された延暦二一年は、平安京の造営と征討の両事業が困難を窮めていた「内憂外患」の状態にあった。変革期の桓武朝において、造都と征討の二大事業は治世の象徴である。在任中に自らの治世を含めた史書を編纂させるなど、確固たる信念と自信を持って改革に臨んでいた桓武天皇にとって、遅々として進まぬ造都と敗戦の続く征討は屈辱そのものであったに違いない。ところが、胆沢城の完成後、阿弓利為と母礼が降伏し、坂上田村麻呂に伴われて入京した。この降伏こそ、宝龜五年（七七四）の海道蝦夷の反乱に始まった征討における初の本格的勝利であった。天皇や官僚は、長岡京造営の基準線上の交野郡楯山において蝦夷の梟帥を斬殺することによ



- A. 交野山 B. 甘南備山 C. 郊祀壇
D. 楯山推定地

図6 造都と征討の接点

って、一体的に捉えられてきた両事実を完結させようとしたのではなからうか。空間論的な視点から、造都と征討の接点について図示したのが図6である。この図に見える長岡京と交野山を結ぶ線こそ、変革期の桓武朝の諸改革の出発点とな

った基準線であつた。その基準線上で二虜を処刑することによつて、律令国家は、初の本格的勝利を契機として、改革を完璧なものにしようとしたと考えられるのである。

すなわち、国土計画の基準線上の河内国楯山において処刑したのは、外延的拡大の象徴である蝦夷征討と内政の象徴たる都城造営を空間的にも一体化させ、諸改革を完成させるための儀式であつたと考えられるのである。

胆沢城の完成と二虜の殺害を契機として、東北経営は順調に進展した。延暦二二年（八〇三）の志和城造営、同二四年の胆沢城への鎮守府移転と、開拓前線は一挙に北上する。一方、造都事業は依然として難行し、延暦二四年の「天下徳政論議」の際にも造営は完了しなかつた。造営が終わらないまま、桓武天皇は、延暦二五年（八〇六）三月一七日に崩御した。『日本後記』延暦二五年四月七日条は、桓武天皇を評して、

（前略）天皇徳高峙、天姿巖然、不_レ好_二文華_一、遠照_二威徳_一、自_レ登_二宸極_一、励_二心政治_一、内事_二興作_一、外攘_二夷狄_一、雖_二當年費_一、後世頼焉³¹

と記す。ここでも「内事興作」と「外攘夷狄」を一体のものとして認識していた桓武天皇の政治姿勢を見ることができるのである。

四 小 結

本稿は、従来個別に論じられることの多かつた桓武朝の造都と征討の二大事業についてその接点を探るべく、空間的考察を行ったものである。その結果は、次のようになる。

- 一 交野山は、古代交野郡の神南備山的機能を有しており、地域計画の中心として認識されていた。

二 藤原継縄や百濟王氏と深く結びついた桓武天皇は、長岡京遷都に際して交野郡に郊祀壇を基準として、長岡京の位置を設定した。その際、交野郡の地域計画の中心である交野山を基準とした南北線を設定し、これをもとに朱雀大路を測設した。この南北線は、平安京遷都後も国土計画の基準線として意識され続けていたと思われる。

三 延暦二十一年、胆沢城の完成にともなうて、蝦夷の梟帥の大墓公阿弼利為と盤具公母礼が、長岡京と交野山を結ぶ南北線にあたる河内国相山（枚方市杉地区）で斬殺された。これは、外延的拡大の象徴としての征夷と、内治の象徴としての造都を一体化させ、「革命的王朝」を完結させようとしたものである。

以上のようになる。これらのことから、変革期たる桓武朝の諸問題を明らかにするためには、個別に考察するのではなくて、一体化したものととして考察することが必要であると考ええる。今後、全国の神南備山や磐座についても条里・交通路・官衙・寺院などの関係を探り各地の地域計画の様相を明らかにしたいと考ええる。

注

- (1) 佐伯有義編『日本後紀 上巻』朝日新聞社、一九四〇、名著普及会一九八二年復刻、七三頁
- (2) 笹山晴生「平安初期の政治改革」、『日本歴史 三』岩波書店、一九七六、二四〇頁
- (3) (a) 藤岡謙二郎『先史地域及び都市域の研究』大明堂、一九五六、同『都市と交通路の歴史地理学的研究』大明堂。
(b) 谷岡武雄『平野の地理』古今書院、一九六三
- (4) 度数の精密な計測することは困難であるが、実際には約二度ほど西に偏しているようである。そこではほぼ真南にあたるとした。
- (5) 千田稔「都城選地の景観を視る」(岸俊男編『都城の生態』中央公論社、一九八七)一一五―一四六頁。福永光司・千田稔・高橋徹『日本の道教遺跡』朝日新聞社、一九八七、一二七―一四〇頁

- (6) 藤岡謙二郎「古代の山頂及び山嶺線の歴史地理学的意義」歴史地理学紀要、二三、一九八一、五―二二頁
- (7) 片山長三『交野市史 交野町略史復刻編』一九六三、一九八一復刻、一一―一七頁
- (8) 桑原公德「条里と集落移動」『枚方市史』一、一九六七、九―一二二頁。本稿で示した条里型地割は、桑原の先駆的業績に導かれながら、一万分の一空中写真(KK六―二)と二五〇〇分の一都市計画図によって抽出したものである。交野郡の条里プランの研究では、景観の上からの正確な分布図の作成が急務である。それについては別稿に譲る。
- (9) 「行基年譜」(図書刊行会編『続々群書類従 第三』一九〇七)、四三〇頁
- (10) 前掲(7)、一〇四―一〇九頁
- (11) 佐伯有義編『続日本紀』朝日新聞社、一九四〇、名著普及会一九八二年復刻、四二二頁
- (12) 足利健亮『日本古代地理研究』大明堂、一九八五、二四六頁
- (13) 前掲(12)、一七九―二〇四頁
- (14) 前掲(3)、(b)一三―一四頁
- (15) 前掲(12)、四五頁及び図二一九、図五一、図八一など
- (16) 前掲(12)、二四四―二四九頁
- (17) 黒板勝美『古事記・旧辞本紀・神道五部書』吉川弘文館、一九三六、二九―三〇頁
- (18) 田中卓『住吉大社神代記の研究』国書刊行会、一九八五、一〇二頁
- (19) 四条駿市『四条駿市史』一九七二、三一頁
- (20) 佐伯有清『新撰姓氏録の研究 本文篇』吉川弘文館、一九六二、二二四頁
- (21) 前掲(20)二二七頁
- (22) 松倉文比古「伊香連の祖先伝承について」龍谷大学仏教文化研究所紀要、二〇、一九八二、一七七―一八六頁。なお、交野郡における物部氏の動向については、同氏より多大の御教示を賜った。記して謝意を表したい。
- (23) 戸田秀典「長岡遷都時における交野」(『藤原弘道先生古稀記念史学仏教学論集』藤原弘道先生古稀記念会、一九七三) 四八―五〇四頁
- (24) (a) 拙稿「桓武朝における郊祀遺跡に関する一考察」龍谷大学仏教文化研究所紀要、二七、一九八九、七五―八三頁。

(b) 「桓武朝における郊天祭祀に関する歴史地理学的考察」(『千葉乗隆先生古稀記念論集 日本の社会と宗教』一九九〇掲載予定)

(25) 前掲(11)四九〇頁、延暦九年二月二十七日条。

(26) 黒板勝美 『新訂増補国史大系日本紀略 前編』吉川弘文館、一九二九、二七七―二七八頁

(27) 拙稿「蝦夷梟帥阿豆利為・母礼斬殺地に関する一考察」(『日野昭先生還暦記念論集 歴史と伝承』永田文昌堂、一九八八)五三三―五五六頁

(28) 黒板勝美 『新訂増補国史大系令義解』吉川弘文館、一九七九、三二三―三三四頁

(29) 前掲(1)一七頁、下巻

(30) 福井俊彦 「蝦夷と造都略年表」(『古代の東北——歴史と民俗——』高科書店、一九八九、一七一―一八三頁。同「征夷・造都と官人」史観、一二〇、一九八九)四五―八一頁

(31) 前掲(1)、八五頁

(追記) 一九九〇年三月一三日、私の恩師であった故福田徹先生の七回忌を迎えた。生前の言い尽くせぬ御厚情に感謝するとともに、先生に小論を献呈したい。